

シンポジウム 「家族看護の実践知の探求」

座長 鈴木和子(東海大学健康科学部看護学科)

長戸和子(高知女子大学看護学部)

看護学は看護実践の中で看護の効果を実証し、実践を変革していくことが求められています。実証に基づいた看護実践が強く要請されているなか、家族看護学は、実践の科学である看護にどのような貢献をするのか、設立10年を経た日本家族看護学会は、看護学の発展のため、どのような役割を担ったらいいのかその方向性が問われています。

このような中で、本シンポジウムでは、我が国で家族を対象とする看護ケアの質の向上に貢献をなし、あるいは今後その可能性の大きい家族看護実践モデルを抽出いたしました。すなわち、①カナダから我が国に紹介され、実践や研究に一つのモデルとして活用されている「カルガリー看護モデル」、②我が国で生まれ、地域看護学や在宅看護領域で活用されている「家族生活力量モデル」、③我が国で臨床への活用が期待されている「家族エンパワーメントモデル」、④慢性疾患の家族員を抱える家族への活用により、臨床と地域をつなぐモデルとして期待されている「家族長期ケアモデル」、また、⑤家族看護のケアの質を向上させていくために、実践知を探求し統合させる方略として「家族看護コンサルテーション」を取り上げました。

我が国で家族看護の実践知を探求し、これらのモデルを推進しているシンポジストの方々に、現在まで蓄積されてきた家族看護の実践知を紹介していただきます。シンポジウム直後、モデル別に分科会が開催され、その分科会では、さらに皆様とディスカッションをしながら、実践へのさらなる活用や適応可能性を検討していきます。

これらのモデルは、まだひとつの臨床的、実験的な試みの段階であり、多数の限界も抱えていますが、シンポジスト達は限界を直視しつつ、対象に家族に、そして社会的文脈の中でモデルを柔軟に修正しています。今回のシンポジウム、そして分科会で、シンポジスト達のモデルの限界に対しての真摯な姿勢や修正を重ねながら発展させてきた過程における苦悩と喜びを共有することが出来るであろうと楽しみにしています。

このシンポジウムが、家族看護学の実践知を探求する仲間が連携する機会づくりの場となるだけでなく、家族看護学以外の多くの看護学領域と連携し、看護学の実践知がさらに豊かに育つ機会となることを願っています。